仏教徒フォーラム

題字は土光敏夫氏筆

発行所
日本仏教徒懇話会
〒107 東京都港区南青山
7-2-1 青康ビル
電話 03(3407)5435
取引銀行 三井銀行六本木支店
非売品

仏教講座公開シンポジウム
知識と智慧をめぐって

木村清孝、近角聰信、森一久の三氏が提言
木内会長は「私の宗教観」などを語る

日本仏教徒懇話会の平成三年度仏教講座は十二月十四日(土)午後二時より、第一信金ホールで、公開シンポジウムの形式で行われた。

「ミリンダ王の問い」をテキストに六月より進められてきた仏教講座の第六講を、とくに現代科学と仏教との関わりを問題意識において、講座会員以外の方々にも参加を願い、自由な立場からの討論を趣旨としたものである。本講座の主任講師・東大教授木村清孝氏と、物理学者・東大名誉教授近角聰信氏、ならびに日本原子力産業会議専務理事・森一久氏のパネル討論を中心に、参加者の発言も交えて「知識と智慧」について究明することとなった。この日約四十名が参加、定刻二時、関根事務局長の開会、趣旨説明から始まり二時間余に亘る真摯な討議が行われた。

なおこのシンポジウムに対して、木内信胤会長より、パネリストとしてではなく、独自の立場から発言があり、世界情勢についての談話に続き、「私の宗教観」と題する近著についての説明が行われた。シンポジウムの全容を掲載し得ないのは残念であるが、パネリストの発言要旨を二面―五面に紹介する。

▲左より森、近角、木村の各氏

▲宗教観を語る木内会長

▲仏教講座シンポジウム参加者

会員懇親会で活発な意見交換
―恒例により菩提樹の中華精進料理で―

日本仏教徒懇話会は十二月五日、釈尊成道の日(十二月八日)に因み、三田の仏教伝道センター三階の菩提樹で会員懇親会を開催した。恒例により中華精進料理を囲み、三十余名の会員が参集、歓談した。午後五時半関根事務局長の開会の辞に続き、木内信胤会長、津村重舎副会長が挨拶を述べ、そのあと参加者から各々発言があって和気藹々裡に進行した。この日とくに仏教講座の講師の一人、津田真一先生が日頃の感懐を披瀝され、数回にわたって発言されるなど、大きな盛り上りをみせる場面もあった。午後七時半を過ぎ、名残りつきぬまま、参加者全員に仏教伝道協会のカレンダーと株式会社ツムラのバスクリンが配られ、閉会となった。

▲会員懇親会の模様

日本文化ヨーロッパセンター
恵光
建立奉讃発足委員会ひらく

ドイツ・デュッセルドルフに建立を進める日本文化ヨーロッパセンター「恵光」の建立奉讃の発足委員会が、平成三年十一月二十日、三田の仏教伝道センター八階ホールで開催された。本会報前号所載のとおり、沼田恵範発願者の熱意により、仏教をはじめとする日本文化、東洋文化を全欧州にひろめ、東西文化の交流をはかることを目的とした「恵光」を完成させるため、大谷光照本願寺派前門さまを総裁に戴き、各界の重鎮の参加によって構成された奉讃の発会である。

午前十一時半開会、総裁ご入場、法輪開扉に続いて、三帰依文、仏教聖典の拝読があり、各役員の紹介の後、総裁猊下のお言葉、委嘱状交付、(土井正治名誉顧問が代表受領)、永野健委員長挨拶、事務局の経過概要報告などが行われた。厳粛な委員会を修了し、十二時二十分懇談会へ移行、渡辺武次郎名誉顧問の発声により乾杯、斉藤英美先生のエレクトーン演奏を背景に歓談が行われた。

▲大谷光照総裁猊下のご挨拶

仏教講座 公開シンポジウム

パネリストの発言要旨

東京大学教授　木村清孝氏
東京大学名誉教授　近角聰信氏
日本原子力産業会議専務理事　森一久氏

木村清孝氏

○今回のシンポジウムのテーマ「知識と智慧」という題は、本年度仏教講座の中心テキスト「ミリンダ王の問い」の中で一つの重要な問題となっている。と同時にこの主題は、現代を生きる我々にとって、根本的な問題でもあろうかと思う。

○仏教では古くから智慧の獲得を究極の目標として掲げているが、今回、現代科学の先端的分野におられる近角、森両氏のご参加により知識と智慧について討論することは、きわめて有意義なことと考える。

○仏教では必ずしも知識と智慧を明確に区別していない。しかし、混乱を避けるために、ここでは一応、次のように定義しておきたい。「知識」とは、世間的知識、我々が現実の社会で生きてゆくための知識を指す。それに対し、「智慧」とは、出世間的な知識、世間の枠組を超えたところで成り立つ知識をいう。

○現代では「知識」が大きな比重をもっている。この「知識」の反対概念として無知と迷信をあげることができる。「知識」の内容は何か、色々な分け方があると思うが、一つは生活知と名づけられるものである。この世に生きてゆく中で、親や友達や周囲の環境から自然な形で修得してゆく、経験的な知識、それは常識とか生活の知恵と呼ばれ、いわゆる悪知恵などもこれに属するといえる。もう一つは科学知である。理論的、体系的に獲得されてゆく知識である。

○生活知と科学知は、きわめて密接に関わってくる。科学的知識を身につけた人にとってその科学知は自然に生活知になってくるし、生活知の中にも科学に裏づけられた知識は沢山入ってくる。

○仏教ではどうか。仏教も正しい知識としての生活知、科学知を尊重する。世間的知識を尊重する姿勢を明確にもっている。仏教における学問の分類として、第一に「声明」がある。これは言語、音声、文法に関する学問であるが、音声の面が強調されて、仏教音楽的なものを指すようになった。しかし元々は言葉についての学問である。第二は「因明」である。これは論理学である。物事を考えてゆくのに正しく推論してゆかなければならない、そのための学問をいう。第三が「内明」である。これが直接、仏教の根本的な真理にかかわる学問、つまり仏教学である。第四が「医方明」、要するに医術であり、医学、薬学などの学問である。第五が「工巧明」といって、自然科学や技術関係の学問である。このように、仏教の内部で仏教者が修得すべきものとして五明をあげており、仏教学以外の分野も大事な学問として設定されている。

○内明すなわち仏教学についていえば、たとえば五蘊無我の思想にしても、冷静な自己分析、自己観察を基本にしている。我々の存在には物質的な面があり、また精神的な様々な働きがある。物事を認識する時には、感覚的受容の作用、観念として捉える働き、区別する判断の働き、また意志的な働きがある。こうした精神的な面での四つの働きに物質の面を加えて五蘊といい、その総合体として我々自身の存在を捉える。そこには自我というような実体的なものはないのだというのが五蘊無我の基本的意味で、この思想にしても、物事を冷静に観察し分析してゆくという科学的態度に貫かれているということができるのである。

○仏教自体も正しい知識を明らかにし説き示すことをしているが、生活知に関しては、一般的にそれが利己的な考えに貫かれており、自我意識に支えられている、と考える。常識といっても、エゴイズム、国のレベルでいえばナショナル・インタレスト、個人でいえば自己の利益、それが中心になっている。これを問題にするわけである。これが第一点。

○次に「知識」というものは、科学知も含めて、絶対化される危険がきわめて高い。大乗仏教になると、そのことを問題にする。実際、我々自身の存在はいうまでもなく、あらゆるものは無常である。知識も例外ではない。それは、何らかの仮説を前提としている。これを絶対化するところに問題がある。現代の社会はとくに科学知を絶対化する傾向が強いと思われるが、そういう知識・概念の絶対化をきびしく否定することが「空」の思想の柱となっている。

○仏教の立場では何を本当の知識と考えるか。ここではそれを智慧と表現するが、基本的には「根本智」と「後得智」という分け方が判り易い。根本智とは、究極的な真実、真理を把握する智、直観的な全人格的な知といえよう。具体的には瞑想体験などを基に体得される知識である。例えば空を悟るとか縁起を見るとかいう表現は根本智の在り方を示していると思う。このことによって、我々の認識構造が一度完全に壊される。そしてこれまではすべてを対立的、相対的に捉え、違うと見ていた考え方が転換され、すべては同じだという世界に立つのである。従ってこの智慧を平等智とも表現する。ここにおいて心が根本的に変換され、自己再生が起ってくると考えることができる。

○後得智とは、一度、根本智によって否定された「知識」が、その世界をくぐり抜けることを通じて洗い上げられ、再び働いてくる正しい知識である。それは物事を存在するままに如実に知り、そのあり方に対応して適切に働くものである。五明などの学問によって得られる知識も、ここではじめて本物になるのではないか。

○このような智慧の修得に関して、仏教では

三慧という考え方がある。聞慧（聞くことによって得られる智慧）、思慧(思うことによって得られる智慧)、そして修慧(修めることによって得られる智慧）である。これらは総合的に捉えられるべきであり、とくに重要なのは聞慧、正しい法、正しい教えを聞くことである。

○我々は新しい時代をどのように生きてゆけばよいか。結論的に言えば、この点について私は基本的に、次の三つのステップを考えたい。第一は、「知識」のもつ根本的性格と問題点をきちんと認識することである。第二には正しい教えを聞くことからスタートして根本的に物事の見方の転換をはかること、つまり根本智の修得を目指すことである。そして第三には、根本智に止まるのではなく、それによる否定的媒介を経た「知識」を活用してゆくこと、すなわち後得智の展開を最終的な願いとすることである。

（以上）

近角聰信氏

○私は、父が仏教者であったことを除けば全く縁なき衆生であり、一介の科学者にすぎない。しかし、仏教の偉い坊さんが、科学に対して宗教は全く無力であるという話をしていたのを聞いて、これではいけない、仏教徒が科学に対して必要以上の恐れをいだくようでは困る、そう思ってこのような会でも積極的に発言するようになった。

○今日の主題は知識と智慧であるが、それは科学的知識と仏教的智慧、したがって科学と仏教が今日の主題だと言える。私なりに解釈している定義を言えば、知識とは整理簞笥、――ガラス戸のある抽出しのついた簞笥――に分類されて収納された品物のようなものであり、知慧とは、そういう品物の在り場所をよく知った上で、適切にそのものを使う方法、を活用する術である。このように定義してみると科学でも宗教でも、どんな分野にでも、知識と智慧があるといえる。

○自然科学においては、知識は実験や解析を通じてどんどん蓄積されていく。ニュートンが老年に、目の前に広がる海のように、知識はまだまだ解明されずにいる、と言ったが、全く無限に多くの知識が存在する。ニュートンは惑星の複雑な運動を解析し、最後は数式にのせて万有引力の法則を見出したが、その全部をまとめた法則が智慧に相当すると思う。解ってしまえば簡単な法則でも解るまでは簡単ではない。鉄の玉と羽を地上に落すのに、空気の抵抗がなければ同じに落ちるというのは、常識では考えられぬことだが、実際に真空の中で実験すれば羽は鉄と同時に落ちる。そういうことを見抜くことが智慧である。

○科学者の産み出した法則は堅固であり、その実験事実の上に二階を作り、さらにその上へと科学の殿堂を作り上げる。今日の自然科学が立派な成果を挙げているのは、その一つ一つの積み上げによる。

○では宗教における知識と智慧とは何か。私は浄土真宗の家に生れたが、真宗では勉強をして早く信仰に近づけとは教えていない。歎異抄に「学問してこそなんぞと、いいおどさるゝこと、法の魔障なり、仏の怨敵なり」という一節がある、つまり大切なことは念仏を唱えて仏の慈悲を戴くことであって、学問などは必要ないというわけである。

○宗教における智慧とは、自分の出した智慧ではなくて、「よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」（歎異抄）ということになる。

○宗教が科学的でないと言ったが、それは当然のことである。宗教の対象は心であり、自然科学の対象は自然現象であって、違うのは当然である。宗教家は、宗教が科学的でないという表現に臆する必要はない。最近、漢方薬がよく効くということから、「気」というものについての議論がテレビで行われ、気もやがて科学的に証明できる日がくることを期するという結論になっていたが、それはおかしい。健康と気が関係あることは、それが事実ならばそれでよい、科学的に証明するという言葉を使う必要はない。精神とか気とかを科学で証明することが必要だとは思えない。

○科学者も人間である。偉い科学者でも我欲に勝てないということがある。科学者は全く公正でなければならないのだが、必ずしもそうでないのは残念である。日本が諸外国に比べ最も劣っていることは、平気で嘘をつくことだと思う。嘘も方便などと、おおらかなところがいけないのかもしれない。西欧の人は聖書に手を置いて一度誓えば決して嘘は言わない。この頃の日本では、科学者でも嘘を言うことがある。

○一方、宗教家についていえば、この頃、北陸の方で原子力発電に反対を唱えている坊さんたちがいると聞くが、僧侶は宗教のことを熱心にやっていればよい。原子力の反対を宗教家が唱えていけないとは言わないが、唱えるなら、人並みに原子力について勉強してからにしてもらいたい。ムードで反対するというのは困る。

○科学者でも宗教家でも、死は必ず来る。百歳とか百二十歳までは生きるとしても。その後に来る死に対して平然としておれるか。そこに人間としての科学者と宗教家の接点がある。釈尊の「説法踌躇」に関連して一つのエピソードを話しておきたい。

○私の師の茅誠司先生が東大を辞められる時、茅コンファレンスという会が作られた。毎年の夏に百人前後の人々が集まってゼミナールを開くのだが、第六回のコンファレンスが妙高高原で開かれたとき、特別講演として、中村元先生のお話しがあった。そのときに一人の大学教授が質問をした。「釈尊が悟りを開かれてから説法を始めるまでに二週間ほど時間が経ったが、その間、釈尊は何を考えておられたか」、というのである。この質問に対して中村先生は、「私には或る考えがあるが、それをお話しすると影響が大きいので、ここでは話さない」、と答えられた。そのあとのレセプションで、その教授に、あなたはどう思うのかと聞いたら、「釈尊は、人間が死ねば灰になるだけだと悟られたに違いない、しかしそれを話したのでは世の人に真意が伝わらないから、二週間かけて極楽浄土のシナリオを考えられたのだろう」と言われた。私は大変面白い話だと思った。

○私がアメリカで御馳走になった老婦人に、「あなたは次の世があると思うか」と質問された。私は余命いくばくもないその婦人に、「人間は死ねば灰になるだけ」とは言えなくて、「死後の世界、極楽浄土があるんだ」という話をして別れた。ここのところは誰もが問題として、何とかうまく心に折りたたまなけ

ればいけない話だと思う。そこはやはり、自分で智慧を出して考えるという性質のものではなく、「よき人の仰せをこうむりて信ずる他に別の子細なきなり」ということが生きてくるのではないかと思う。

森　一久氏

○私は本日頭書のような肩書になっているが、一学徒のつもりで話させて頂きたい。戦時中に理論物理学を勉強し、中でも当時あまり役に立ちそうにない素粒子論で湯川秀樹先生に教えを受けた。その後自分で選んだわけでもなく、自然に道の開けるまま歩いているうち、原子力という、人間という存在の象徴のような分野の真只中にいることとなった。

○この原子力という科学技術が人々の眼前に現われたのは、原爆という地獄の形相であった。私の両親もこれで亡くなった。まことに不幸なことだが、最悪の姿から始まったこの技術が、いまでは世界の全電力の六分の一を原子力発電でまかなわれている。今日科学技術の弊害がいわれており、たとえば自動車事故で年々二万人もの命が失われていても、便利でもありこの産業での雇用も膨大な、社会がすでに定着している中では、安全への努力にもおのずから限界がある。

○今は、人間が発見した全く新しい〝核変換〟という科学技術を果して人間自身が扱いこなせるかどうか、試されている時期だろう。日本の原子力に関するかぎり、どうやらいまのところ失格ではないというところまできているといえる。私はむしろ、原子力平和利用に取組んだことによって、人間社会が、思慮深く一つの新技術を包みこんで発展させうるという大きな経験を得つつある、むしろそのことに仕事の意義を感じつつある。

○さて私の仏教の勉強はゼロに等しいので、直感的で用語も不正確な話しになることをお許し頂くとして、先日「仏教徒フォーラム」誌で中村元先生の〝宗教の定義〟という項を読んだとき、ふと、これは〝科学〟の定義ではないかと思われた。科学とくに基礎科学は、人間の見る森羅万象の〝理法〟を追求するもので、技術はその成果（の一部）を生活や産業に利用する術である。強いていえば、科学に関連するのが智慧であり、技術に対応するものが知識といえるのではないか。私は、基礎科学が追求した筋道と成果、それは結局釈尊が実に二千五百年も前に観た〝存在の理法〟を跡づける結果となっている。――なお、これはもっとくわしくお話しもしたいことだが、仏陀の観られたこと或いはその追求といったことと或る種の経文や仏教儀式などとの関係は、科学と技術とのそれによく似ているといえるのではないだろうか。

○今日、技術による弊害とか環境破壊が問題になっているが、科学で見出された法則（そのほとんどは一面的なもの）を、実際に人間の生活等に利用していく、その間をつなぐものは人間の心であり、心というものは実は人間の本性と社会的条件からつくられるものである。一面さえ判れば利用はできる。このことを識れば、こころの大切さも忘れることはないであろう。

○基礎科学がお釈迦さんの跡を追っかけているといったが、縁起の理法とかすべては無常ということは、今日の基礎科学からいえば、まことにその通りといわざるをえない。ここで人間の認識のあり方を考えるため、生物の話にふれてみたい。人間は単細胞から何億年もかかって高等生物に進化してきたその過程で、色々な認識システムを獲得してきた。そしてその中には人間に進化するまでの間に獲得した認識の態様と、生れた後に後天的に獲得したそれとがある。

○我々が一つの絵を見て美しく思う。また或る音楽を聴いて快よく思う。そういう認識を人間はいかにして体得したか。それは人間が受胎するまでに、あるいは受胎して成長するまでの間に、色々な条件の下で体得したものと思う。大変示唆深い話しがある。それは、プリズムを使って上が下に見え、右が左に見える眼鏡が作れるのだが、それをつけた人は気も狂わんばかりになる。だが三日ほど経つとその逆さメガネをかけたままで、上下も左右も元通りに見えるようになるという。これはつまり〝上下〟という人間にとっては全く基本的な認識も、〝無常〟なもので絶体的なものではないということである。このようにいろいろ考えて私は、最近全くのドグマでお叱りをうけるかもしれないが、釈尊のお教えの中には、人間の認識というものは、何らかの努力で変えうるということもあるのだ、ということが含まれているのだと私は考えるようになった。

○人間の認識の一つの枠組として、時間と空間がある。一万年くらい昔に、人間は時間というものがどうにもならない、一方に流れることに気づいて、死というものに畏れを抱き色々な宗教が生れた、と同時に、科学的に太陽が規則正しく往き来する現象など、そのわけを知りたいと、思い、科学的思考がはじまった。時間が一方的に流れることが人間の悲劇の全てだといえる。この意識は人間独得のもので、動物には幸か不幸か、ない。

○時間の認識が、解脱との関係で問題になるが、その時間も決して絶体的なものでなく、無常なもの。それは相対性理論によって指摘されたことだが、考えてみれば難かしいことではない。人間が目で見るのはすべて光によってであるが、光というものは普通のものと違っている。光より速いものはこの世にはない。それを数式で解いていくと相対性理論が出来上る。もし光より早いものがあると人間が認識したら、世の中のすがたは目茶苦茶にみえるであろう。

○この時間というものも、最近の物理学の最先端では、物質が存在するから時間があるのだという定説になってきている。空間についても、何もない空間というものは、どうやら存在しないということになるかもしれない。空間を「空」に置き換えては間違いになると思うが、空間も縁起の理法に支配されている。しかしその中身は科学的には全く追求できないものなのかもしれない。

○人間の認識の枠組について、理論物理的に突込んでいくと、人間が科学を勉強すればするほど、いかに無常なものであるかが判ってくる、それが今日の科学技術の問題であり、それをどのように生かしてゆくかは人間の心の問題であると思う。そして基礎科学も社会的な条件、国益といったものに汚染され、難しくなっている。一例を言えば超電導である。マイナス二七三度（絶対温度〇度）になると電流は抵抗なしにいくらでも通る。ところが

最近、常温でも超電導の可能な材料があるということで大騒ぎになっている。そこで、その利用について、特許とか金とかの問題が出てきて、色々な制約を受ける。発見した学者は大変悩むという、心の問題が出てくる。

○我々の存在の意味を考えてみる。科学も、仏教や他の宗教が存在の理法を追究するように、真理を追究する。いま科学技術の時代といわれるが、実はいままで科学で判ったことは大したことではないといえる。光の速度を一定のものと考えざるをえない、何故かということは判っていない。同じようにこの森羅万象を科学的に説明するのに必要な基礎的な数字つまり科学で説明不可能な〝定数〟が三十くらいもあるのである。そして人間の心、あるいは欲が手ぐすねひいて待っている。私は短絡的に科学が悪いのでなく使う人間が悪いのだと言うのではない。人間なるが故に逃げられない認識のパターンと、後から得た色々なものがある。それを一つ一つ、つきつめていけば、仏に近づけるのかもしれない。

○人間は今後永い間地球とともに、或いは他の天体と平和に共存してゆかねばならないが、そのためには、科学と技術をつなぐ心の問題、そのような心を生み出す社会のあり方が非常に大切だと思う。

（以上）

〈追加発言〉

近角氏

○知識のない所に智慧はない、しかし知識だけでは働かない、智慧が必要だ。試行錯誤の結果が智慧になるともいえる。

○心理学では、たしかに心を自然科学的に扱う、が宗教が扱う心とは違う。宗教が科学的でないと言われても、少しも臆することはないと言いたい。

○仏教の信者が科学なしに生きてゆけるとは言わない。この世を便利に、人の迷惑にならないように生きてゆくのに科学的知識が必要なことは言うまでもない。しかしそれを仏教の中にとり入れてこれも仏教だという必要はない。

○自分の心を自然現象として理解しようと努力しても、それは悩みの解決にはつながらない。それを解決しようとするのが宗教である。

○親鸞聖人が学問をしてなんどと……法の魔性なりといわれたその学問とは、自然科学のことではなく、仏教の難しい学問、高野山あたりの聖道門の高僧たちの学問を指していると思う。

森　氏

○釈尊が直観的に見られた宇宙の原理、存在の理法が経典とか色々な資料を通じて説明されている。それを各人が体得して、苦を滅するために役立てようとしているのが智慧ではないかと理解している。苦を滅するには、六識とか人間の認識の中にある色々なものを滅してゆくことであり、執着を捨てることであろう。今日の我々の世界でそれは難しいことだろうが、一つ一つ真剣にぶつかってゆく所に智慧というものが出てくるのだと私は思う。

○木内会長のお話しの中に仏教は進歩を続けているという言葉があったが成程と思った。我々にとって時間を逆転することができないことが苦の根源だと思うが、科学の捉えた時間とは何か、これはまだ究明されていない。そこで科学者が宗教を勉強し、宗教家も科学を勉強して、その対話の中から、一つの進歩が得られるのではないか。そこに仏教は今も進歩を続けていると言える理由があると思う。

木村氏

（まとめ）

○智慧と苦の解決という問題について、仏教は智慧の体得、実現をめざしているといえる。出発点は苦の解決にあることは確かだし、智慧によってそれが解決されることも明らかだと思うが、それだけではなく、智慧はもっと大きな真実の解明という働らきをもつと思う。自分の苦が解決しても、広く衆生の苦の解決に向う、それが後得智であり、大切な所だと思う。

○本年度の仏教講座で、「ミリンダ王の問い」を勉強してきて、そこにはアビダルマ仏教の細密な議論、また大へん科学的な分析も入っていることがお判り頂けたと思うが、本日のシンポジウムで、科学の立場からのお話しを伺い、そのご指摘も踏えながら、改めて仏教の基本的思想に立ち返って考えていかねばならないと感じている。そしてもう一歩進んだところで仏教の教えを正しく理解してゆく努力が必要だと思う。

○近角先生から、死と死後の考え方について根本的な問題提起があり、また森先生からは我々の存在の意味、無常の存在としての自己についてお考えが述べられている。これは結局誰もがそこから出発してそこに帰ってゆく問題なのだと思う。こういった問題をしっかりと踏えた上で、今後の勉強を進めたいと思う。

○この講座はあと何回か、ひき続いて「ミリンダ王の問い」を中心に勉強を進めてゆくが本日提起された諸問題を踏まえ、大きなところから仏教の具体的な思想を問うてゆく、そういう態度、姿勢を持続することによって、充実した成果を挙げ大円成に至ることができると信ずる次第である。

（以上）

〈ご案内〉 仏教講座 最終講「公開シンポジウム」の開催

平成三年度仏教講座も昨年十二月十四日の公開シンポジウムを終り、残すところ二回となりました。第七講は二月二十一日（金）午後三時より、第八講（最終講）は三月十四日（土）午後二時よりいずれも第一信金ホールで開かれます。とくに最終講は再び公開シンポジウムの形をとり「生死と涅槃」をテーマに、三人のパネリストを中心に行われる予定です。

講座会員以外の方々にもご参加頂けますので、ご希望の向は左記宛お申し込み下さい。

港区南青山七―二―一
日本仏教徒懇話会　仏教講座係
電話　三四〇七―五四三五

平成二年度仏教講座

これからの仏教―その三（終）

東京大学教授　木村清孝氏　講述

○個人のレベル―自己を磨く―

第一の個人のレベルは自己を磨くことです。磨くといっても、むしろ磨けるものではなく結果として磨かれるということです。すべて仏教は、浄土門、聖道門を問わず、他力が基本です。なぜなら、仏の力、真実なるものの支えがあってはじめて修行それ自体が成立するからです。従って、自力聖道門というのは本質的にはありえないのです。これは浄土教の側から自らの立場を明確にするために言われたことですが、華厳経、法華経でも同じです。これは実は、瞑想その他の仏教的実践を続けてきますと自然に頷かざるをえないこと、自ら自覚させられることなのですが、この「他力」の自覚が肝要だろうと思います。これが一つ。もう一つは、にも拘らず、私自身のあり方、現実の姿が、いかに業的なものであるかを知るということです。玉城先生がよく言われる業熟体としての自己の自覚です。遙かな過去から薫習（くんじゅう）され、積み上げられ、練り上げられてきた業の働きが我々を貫いていること、そういう業的な自分自身に目覚めることです。これを通じて私たちは仏の教え、導きによって行じてゆくほかはないことが、身にしみて解ってくるのだと思うのです。

「自己を磨く」ということ、自然と人格の光が発してくるというのは、その結果に他なりますまい。

或る坊さん（南嶽懐譲）が或るとき、一生けんめいに瓦を磨いていたところ、その弟子の一人（馬祖道一）がそれを奇妙に思って質問したという話があります。瓦は磨いても宝石のようには光りません。それは一見無駄な行為に見えます。が、それは先入見です。自分自身の実践のあり方、生き方を考えますと一人ひとりが自分の瓦を磨いてゆくしかありません。いや、実は瓦は瓦のままに光を発しているのです。すべて人間は、小さな努力、精進の積み重ねの中で、利他の願いに生きる自己を実現してゆく、それしかないと思います。原始経典の「涅槃経」によりますと、釈尊の遺言は「この世は無常である。怠ることなく努め励めよ」と、ただこれだけです。この言葉は、自らが日々つとめる中でこそ、深い味わいをもって頷かれる教えだと思います。

無常であるという認識は、二つの道を指し示します。一つは無常だから好き勝手に楽しくやったらいいという方向、一つは無常なる故に日々の努めが大切なのだという方向です。釈尊は後者をとられました。仏教徒たる私どもは素直にそれに従いたいものです。ただ、それには、この世界を終ったら次の世界、またその次の世界があることを信ずること、言葉を変えれば、大きな時間の流れにおける大いなる生命の持続への信仰がなければなりますまい。

○地域のレベル―グループ活動の推進―

第二に、地域のレベルとしては、グループ活動の推進です。いま様々な形でのボランティア活動が日本でも生れていますが、宗教的な場でのボランティア活動はまだ少ないと思います。これだけ豊かになって、時間的にも精神的にも余裕ができてきているはずですから、仏教的な心による活動の展開は十分可能なはずです。

中国の隋から唐にかけて三階教という仏教の一派が生れています。この宗教は、二つの柱を立てて実践の問題を考えております。その一つは、お互いに自らのうちに悪を認めることすなわち認悪です。いかに至らない自分であるかを深く自覚せよというのです。もう一つは他のすべての人、生きとし生けるものに普く手を合わせ敬うことつまり普敬です。こういう立場から三階教では仏にお供えしたり坊さんに供養することよりも、貧しい人、孤独の人、困っている人たちに手を貸し助けることの方が、大事な仏教の実践なのだとまで言っています。これは私たちがこれからの仏教のあるべき姿を見究めていく上で大きな示唆を含んでいると思います。実際、三階教では、この精神に則り、当時の貧しい人々が助け合う具体的な運動が起っています。寺に納められた金をお互いに融通するとか、物を分け合うとか、現実に行われているのです。

この地域レベルでの実践活動は、あくまで宗教的な精神に根ざしたものでなければなりません。利害得失を基軸とするようなものや現実的な欲望充足のための運動であってはなりません。質を変えて、本当に望ましい、平等で敬い合える社会をどうしたら実現しうるかという、利他の願いに貫かれた運動が行なわれてはじめて意味があるといえるのではないでしょうか。

○国際社会のレベル―諸宗教との連帯―

国際社会のレベルで考えますと、何よりも他の諸宗教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教などとの連帯が必要です。そして具体的な活動としては例えば仏教が二千年以上に亘って追求してきた死の問題に関する積極的な発言やアピールなどが考えられましょう。先日、ＮＨＫで立花隆氏が臨死体験のリポートをしていましたが、死への関心は国際的に高まってきています。しかし仏教側からの発言は決して大きくも多くもありません。

また環境の問題ですが、仏教では依正不二などといいます。我々自身の存在すなわち正報は、環境すなわち依報と離れてはいない、同じものの裏と表なのだと捉えています。そういった思想から当然環境問題に対しても、発言ができるはずです。しなければならないと思います。さらに戦争の問題についても、もっと積極的に発言すべきではないでしょうか。私は、根本的には仏教は戦争否定の立場であろうと思いますが、やむをえず認める立場をとるとすれば、そのあるべき形についてアピールすべきでしょう。そのためにも宗派教団、さらには仏教という枠組さえも外し、共同してゆかなければ、大きな声にはなりません。

キリスト教は依然として西欧世界に大きな

影響力をもっています。イスラム教の世界に対する力については言うまでもありません。そうした諸宗教とも、できる所から手を結んで、共通の立場から発言してゆくべきです。また大きな国際的集会への参加またはそのサポートも求められてくると思います。現に故葉上照澄先生などが遂行された、諸宗教を超えた共同の平和の祈りなどの例もあります。こうしたことが色々な形で、むしろ日常的に行なわれることが必要なのです。一ヵ所に集まることが大変なら、時間を定めて、世界中それぞれの所で祈るというようなこともできると思うのです。一ヵ所に集まらなくても、手をつないだことが明確になるような活動が展開されてゆかなければなりません。

その他、地球上にはいろいろな問題が現存しています。医療、動物愛護、難民、貧困、等々の問題が、地球規模で考えられなければなりません。日本はODA予算で相当額の金を出していますが、必ずしも有効適切に使われていないと聞きます。まことに残念な話で何とかしなければと思いますが、それとは別に、仏教界が中心になって、有意義な活動を推進しあるいは支援協力してゆくことも考えられるべきです。

〈仏教者の責任〉

以上、大きく研究活動、実践活動に分け、私の今考えていますことを整理して大づかみに申し上げました。最後に、本講の結びとして強調しておきたいことは、現代の仏教者には、何よりもまず衆生、生きとし生けるものの為に展望を開くという責務があるということです。人間だけではなく、生きとし生けるものの未来を開くことです。動物愛護と申しますと、動物と人間は違うという前提に立つことになりますが、動物も共に生きる仲間であり、人間が動物より上であるという考え方は、仏教はもとより、インド思想にはありません。すべての生きとし生けるものの為に展望をひらいてゆくことが、これからの活動の大きな目標です。そのためには、我々自身が現代社会への対処の仕方を見極め、前向きに生き抜いてゆかなければなりません。

思うにその出発点はもちろん、日常的な心構えです。ここからスタートしてはどうかと思うことが幾つかあります。

その一つは人や物に対する感謝の心、畏敬の念です。長生きをしている老人の心構えの中に、まわりの人や自然に対する感謝の気持が共通にみられます。結果的にはこれが長寿の秘訣にもなろうかと思われます。

さらにもう少し高いレベルで言えば、それは「法華経」に登場する常不軽菩薩に代表される菩薩の心、三階教でいう普敬の心です。自分が遇うすべての人に、あなたは必ず仏になりますといって手を合わせる、この精神の回復が、とくに現代は大切だと思います。

第二点は、ものの正しい見方を身につけることです。現代は科学の時代といわれていて我々は現実に存在するものについて種々分析し、確実に理解していると思っています。しかし実は極く表面的な事実の認識に終っている嫌いがあります。インドのクリシュムナルティという人は、事実を正しく認識することが目覚めに通じてゆくと言っています。我々が物を見る時には、こちらの必要に応じ、一つの先入見で見ている、そのものの姿をそのとおりには見ていないというのです。

マックリントックというトウモロコシの研究家でノーベル賞を受賞した女性の学者は、トウモロコシに問いかけ、トウモロコシから返事をもらう喜びを長い間味わってきたと述懐しております。つまり彼女はトウモロコシを通じて生物の心を心とすることができるようになったのです。トウモロコシにすべてを学んだのです。

「華厳経」の中にも、十二年間海を見続けてきた善知識の話が出てきます。海を見つめていく中で、海が蔵していた宝をどんどんこちらに見せるようになって、海の真相、世界の姿が判ってきたというわけです。仏教で如実知見といいますが、まさにありのままに見る、これが仏の知恵です。こちらの先入見をなくして、事実が語るもの、事実が示すものをそのとおりに受けとる、これが本当にできれば仏なのです。それは物に対してだけでなく、人に対してもそうです。全ての人が私にとって善知識であるという所まで仲々ゆきませんが、その資格をすべての衆生はもっています。こちらがどう対応するかで、すべてのものや人がこちらにとって先生になるのです。

もう一つの点は、周囲を余り気にしないということです。日本人の多くはそれを気にし過ぎます。しかし世間体を気にしてばかりいては何もできません。主体的な生き方ができなくなるのです。お互いに利他の願いをもちながら、自由にのびのびと生きることを心がける、そこに新しい世界が開けてくると思います。世間的常識はあまり頼りにできません。

まだ申し上げたいことは多々ありますが、長時間に亘りましたので、以上をもちまして私の話を終らせて頂きます。ありがとうございました。

（以上）

〈木内信胤会長の近刊書ご紹介〉

私の宗教観

プレジデント社発行
B6判一七八頁

目次

第一章　キリスト教と仏教
佛教哲理と「一神教のドグマ」・「佛教哲理」とは何か・「佛教は現在も進歩を続けてゐる」

第二章　そこはかとなく
二、三のことを書いてみる
なぜ再び「宗教の時代」なのか・「久遠の一心」について・「イスラム教のこと」「キリスト教のこと」

第三章　私の宗教観、仏教観
「宗教」が時事問題になってきた・私の考える「宗教」「信仰」「悟り」・私の法華経観・佛教の根本にあるもの・「心外無一物」・法華経との出会いとその後の私

僕の自画像

善本社発行
B6判一二五頁

目次

1　まづデッサンを描いてみる
2　「痛い目」と「嬉しさ」とについて
3　いかもの喰ひ
4　おカネのことについて
5　「世捨人的心境」と「身を粉にしての努力」との同時併存
6　絵のこと、音楽のこと
7　僕の「思想」と「仕事」とに通じる「総合性」について
8　いまの僕

竹俣高敏先生のご逝去を悼む

日本仏教徒懇話会世話人・監事の竹俣高敏先生が昨年十月三十日に逝去せられました。謹んでお悔み申し上げます。

竹俣先生は明治四〇年五月四日のお生まれ、東京商科大学ご卒業後、日本興業銀行に入行され、審査部長を経て日本開発銀行理事、そして興銀に戻られて常務取締役、さらに日立製作所専務取締役を経てトキコ副社長、社長と歴任せられ、昭和五一年に相談役に就任されました。当懇話会の発足とともに、世話人にご就任頂き、終始ご懇篤なご指導を賜わりました。昨年十月二十二日の仏教講座には御元気にご出席頂いておりましたのに、旬日を出でず先生の御訃音に接するとは、誠に痛恨の至りに存じます。これまでの御鴻恩に深く感謝申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第です。　合　掌

日本仏教徒懇話会　世話人一同

聖語より

信心と後生の救い

相応部経典巻六、大篇十一、預流相応三、摩訶男(一)を要約して引用させて頂く。

世尊がカピラエ城郊外ニグローダ園に留まっておられた時、釈迦族の篤信の在家者摩訶男（マハー・ナーマ）が次のようにおたづねした。

「大徳よ。カピラエ城は豊かで住民も多く市中は混雑しております。私がこちらで仏さまや長老がたにお仕えして夕方戻りますと、狂奔する象や馬や乗物、車や人に出遇います。大徳よ、その時私は、仏さまを、法を、僧伽を敬う念を忘失します。そのような時、もし私が命終する（死ぬ）ことがありましたら、どのような後生を享けるのでございましょうか」と。

仏さまは次のように諭された。「摩訶男よ、怖れなくてもよい。お前には悪しき命終はないであろう」と。そして更に語られた。

「次の四つのことを保つ者は必ず涅槃に趣き入るのである。四つのこととは何か。

第一は、仏さまは『応供・正等覚者・明行足・善逝・世間解・無上師・調御丈夫・天人師・仏・世尊』であるとの絶対の浄信を持っていること。（註、この十項目は仏さまのお徳を象徴するもので「仏の十号」といわれる。）

第二は、法について『法は世尊により、よく説かれた。それは現に証得されるもの、直ちに果報のあるもの、涅槃に導くもの』との絶対の浄信を持っていること。

第三は、僧伽について『世尊の弟子衆は、善く行ずる者、直く行ずる者、正しく行ずる者、和敬して行ずる者、尊敬・供養・合掌に値し世間無上の福田である』との絶対の浄信を持っていること。

第四は、正しい智慧と解脱の聖なる落着きに導く生き方に背かぬよう心がける（戒を尊重する）ことである。

そうすれば、例えば東に傾いている木を根元から切れば必ず東の方に倒れるように、この四つのことを保つ者は（何時、如何なる命終によっても）必ず涅槃に趣き入るのである」と。

(註)。この短かい経典を読むと一人の在家信者の真率な問に対し、仏陀釈尊が深い思いやりをもって答え導いておられるお心が切々と感ぜられるのである。この問は私たちに共通の問である。仏さまは直ちに入ると言われていないが必ず趣き入ると言われている。カピラエ城の混雑の様子は今の交通の危険を思わせる。

仏教用語と日常生活 (14)

他力本願（たりきほんがん）

日常生活に取り入れられている仏教用語にはもともとの意味とは少し違って使われるものが多いが、「他力本願」という言葉ほど、誤解され誤用されているものはあるまい。

このきびしい人の世を生き抜いてゆくのに他人の力や僥倖をあてにせず、自分自身の責任と努力で苦難の道を切り拓いてゆく、それは立派なことであるし、当然の心構えであろう。しかしそのことを表現するのに、「他力本願ではだめだ」と言ってしまうと、重大な問題をひき起こすことになる。

他力というのは一般用語ではない。自力という言葉が、自力更生とか、自力で這い上がるとかいうように、我々の日常語として扱われるのに対し、「他力」は漢和事典にも仏教用語としてしか説明されていない。浄土門とくに親鸞聖人の教えでは、他力は仏の力、阿弥陀如来の力であり、すべての人々を救わねばならないという仏の誓い、誓願を、他力本願と謳っているのである。

我々凡夫は煩悩に満ち溢れ、苦しみの世界に生きている。どんなに努力しても自分の力ではその苦しみから解放されて悟りに行くことはできない。ところが阿弥陀如来は、我々を救おうという誓願を立てられ、大慈悲心によって仏・菩薩になられた。我々凡夫はこの大慈悲心にすべてを任せて仏を念ずることにより、一切の苦悩から解放される、これが他力本願の真意である。中国の曇鸞大師は「人に悟りを求めさせる力も、悟った人が迷っている人々を教え導く力も、他力による」と言っている。他力こそは生きとし生けるものを包摂する限りない力だというのである。

他力本願は真宗最高の理念と言えよう。けれども、親鸞聖人がこの教えに徹するに至るまでには、血のにじむような勉学、修行、そして煩悩との戦いがあったことを見逃すわけにはいかない。自力の極まった彼岸に他力の悟りがあったのである。（瑛）